

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	TAYLOR Pamela Marie (テイラー パメラ マリー)
論文題目	Differentiating the emotion of horror from awe, fear, and moral disgust based on psychological appraisals (戦慄感情の弁別性：畏怖畏敬、恐怖、道徳的嫌悪感との心理的評価に関する比較研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、英語話者において使用頻度の高いhorrorという表現で経験される感情に着目し、類似する概念との心理的弁別性について、理論的・実証的に検討を加えたものである。感情研究の一連の流れにおいては、いくつかの領域軸（たとえばポジティブさの高低、覚醒度の高低など）における認知的評価を用いた弁別性の有効性が論じられてきた。horrorは、行動やメンタルヘルスなどの心理的側面に影響を与える可能性がある重要な感情であるが、実証的な研究はまだほとんど行われてこなかった。horrorと他の感情経験（awe、fear、moral disgust）を弁別することにより、horrorを引き起こすような状況への適応的な行動や対処についても検討することが可能となる。</p> <p>第1章では本研究の重要性ならびに理論的背景について、horrorとawe、fear、moral disgustとの弁別の重要性について、先行研究を踏まえながら論じられた。従来の研究ではhorrorはfearとdisgustの混合感情、あるいはfearとaweの混合感情として捉えられることがあったが、近年の分析ではhorrorの弁別可能性についても指摘されるようになった。そして、それらの感情の弁別性には既存の認知的スキーマとの一致・不一致の程度、生存に関連する障壁の認知の要素が関わっていることを論じた。</p> <p>続く第2章においては、心理学における感情研究について論じた。感情はどのように定義されるものであるか、どのようにしてある感情経験が他の感情とは異なる経験として形作られているのか、感情とはそもそもその言語表現に応じて分類的に捉えられるものかなど、感情研究をめぐる理論的な背景が論じられた。そして、特定の感情を引き起す要因ならびに、感情が経験された結果として生じる行動傾向は異なっていることから、感情の類似性と弁別性を検討することは有益であることが述べられた。そして第1章で問題提起されたhorror、fear、disgust、aweとは、言語的あるいは心理的な認知評価としてどのように弁別されるのか、どのような共通性があるのか、という点について先行研究の知見を踏まえた整理が行われた。</p> <p>第3章から第6章では実証研究について述べられた。第3章はaweとhorrorの認知評価の弁別性に関する二つの調査研究の方法、分析結果、結果の解釈が述べられた。アメリカ人を対象とした調査の結果、aweは壮大さの認識、認知の再構成を要するものとして定義されるのに対し、horrorは壮大さの一部である極端な危害と、認知の再構成を要するものとして定義されるという共通性があった。その一方でhorrorはaweとは異なり、極端なネガティブさ、生存に関わる情報探索、感情を引き起こした刺激からの乖離欲求があるなどの弁別性があることが見出された。</p> <p>第4章はfearならびにmoral disgustとhorrorとの認知評価の弁別性に関する二つの調査研究の方法、分析結果、結果の解釈が述べられた。アメリカ人を対象とした調査の結果、horrorにはネガティブさにおけるfearやmoral disgustとの共通性がある一方、horrorはより危害への認知焦点が高いこと、他者に対する共感性や援助必要性の認識も高いことが示された。</p> <p>第5章は第4章の結果を踏まえて、fearとhorrorについて、危害に対する認識の違いがもたらす弁別性についてより詳細に検討した調査研究の方法、分析結果、結果の解釈が述べられた。アメリカ人を対象とした調査の結果から、実際の危害がない状態でのリス</p>			

ク認知がfear感情を高めるのに対し、horrorは起こった危害の認知により生じることなどが示された。

第6章は第4章の結果を踏まえて、moral disgustとhorrorについて、危害を加えた存在に対する認識がもたらす弁別性について、より詳細に検討した調査研究の方法、分析結果、結果の解釈が述べられた。アメリカ人を対象とした調査の結果から、horrorは危害のレベルが甚大である一方で、危害をもたらした存在が明確でない場合に生じること、moral disgustは危害のレベルはやや低い一方で、危害をもたらした存在が明確である場合に生じることが示された。

第7章のまとめでは、第3章から第6章までの実証研究の知見とこれまでの先行研究を総合させ、horrorが類似感情とどのように弁別されるのかを考察した。そして第8章はhorrorが感情経験として独立的な概念となり得るのかについて検討した。その際には日本語など、horrorがfearと弁別されにくい言語文化圏と比較した考察を行い、なぜ英語圏でhorrorが弁別感情となり得るのかを論じた。最後に第9章と第10章では残された課題と今後の展望、結論について述べられた。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、horror感情の弁別性について、他の感情と比較しながら包括的に論じた上で仮説を形成し、実証的なデータを用いてhorrorが持つ一定の構成要素を明らかにしたものである。その理論的立場は感情の認知評価理論に基づいており、感情をもたらすトリガーやその状況認知評価により、感情経験が生じることを論じている。感情の認知的評価理論研究においては、人の生存や社会的コミュニケーションにおいて重要とされるような弁別軸を見出すことにより、感情の機能が論じられてきた。horrorは、行動やメンタルヘルスなどの心理的側面に影響を与える可能性がある重要な感情であるが、これまでの感情研究においてhorrorについて総合的に検討されたものは少なく、一部トラウマ研究などの文脈において論じられるに留まっていた。また、先行研究のモデルでは、fearの一部として定義づけられることが多く、実際には「起こってしまった状況への認知」が引き起こすhorrorと、「まだ実際には生じていないリスクについての認知」が引き起こすfearとの弁別性などは曖昧に論じられているのみであった。そこで学位申請者は、horrorの持つ特徴について近接する感情(awe, fear, moral disgust)と比較検討しながら、どのような点で共通し、どのような点で弁別されるのかについて、理論モデルを統合的に示した。horrorと他の感情経験を弁別することにより、horrorを引き起こす状況への適応的な対処についても検討することが可能となる。本論文は仮説検証型の一連の研究を実施することを通じてモデルを具体的に検討し、horror感情の弁別性と特徴を具体的に示したという点で、極めてユニークかつ意義が高いものである。

第1章では本研究の重要性ならびに理論的背景について、horrorと他の感情を弁別する意義について論じられ、第2章ではより一般的に感情をどのように理解すべきかという視点から、感情研究をめぐる理論的知見が整理された。そして、horrorがawe, fear, moral disgustとそれぞれ共通性を持つことを指摘し、horrorはaweとは壮大さの認知や認知的再構成を要するという共通性、fearとはリスクやネガティブさの認知、moral disgustとは被害についての認識があるという共通性があることを指摘した。その一方でhorrorに特異な特徴があることを論じた。

第3章ではhorrorとaweの違いについてアメリカ人の調査参加者を対象に二つの質問紙調査研究を通して、実証的に検討がなされた。aweがそのトリガーに対する肯定的な認知や神秘的な壮大さの認知、接近欲求をもたらすのに対し、horrorは危害の極端さの認知と、トリガーへのネガティブな認知や回避欲求をもたらしていることが示された。

第4章から第6章ではhorrorと類似するネガティブ感情であるfearならびにmoral disgustとの類似性と弁別性についての一連の質問紙調査研究が行われた。horrorは他の二つの感情とは異なり、実際に生じた危害の甚大さにより、既存の認知スキーマとの不一致が経験され、被害状況に対する援助必要性が認識されること、被害者に対する共感性なども高くなることが示された。また、fearは他者よりも自己の保全に注意が向けられ、moral disgustはその状況を引き起こした加害者に対する怒りやネガティブ感情が生じる。一方horror感情では、他者への共感性と援助可能性の注意が高まり、加害者など特定の対象に対するネガティブ感情は生じない傾向が見られた。

それぞれの実証研究は仮説検証型で実施されたものであり、緻密な研究計画と条件統制を通じた調査で詳細に検討がなされている。このような点は高く評価できるものである。

第7章以降ではhorrorの認知評価における弁別性が、実際の感情経験時の弁別性

(つまりhorrorという言語ラベルが付与される以前の感情経験の弁別性)につながっているのかどうかという視点で考察を展開し、horrorという言語ラベルを明確かつ弁別的に使用していない日本との比較を行いながら議論が展開された。この論考は文化と言語、感情の3つの関係を考察する上で極めて重要な視点を提供している。学位申請者はhorrorの認知評価の英語話者における弁別性は、北米あるいは西洋文化圏における危害の認知と対応可能であるかどうかという認知欲求と連動している可能性を論じた。さらにはhorror感情が有する機能として、トラウマ的な経験への適応的な感情制御や、他者への共感による互いの援助行動を喚起する社会的機能を指摘した。

学位申請者が考察した通り、今後はアメリカ以外でのデータサンプルでの実証を行い、よりモデルの一般化を行うことが必要である。さらには記憶に基づく振り返りの調査に基づく研究であるため、実際に感情を経験した時の行動などについては検討できていない。これらの要素は今回の一連の研究では検討できなかった課題として残されているが、今後本研究の成果を基盤としたさらなる研究の継続と発展が期待される。

今後の展望としては考察で論じられていた通り、horror感情経験が生じるような危害に対して、人々がどのような反応を示すのかを理解したうえで、どのようにそうした危害に対応していくのかという社会システムを策定していくことにつながっていくことが期待される。そうすれば研究の社会的な意義もより高くなると考えられる。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降